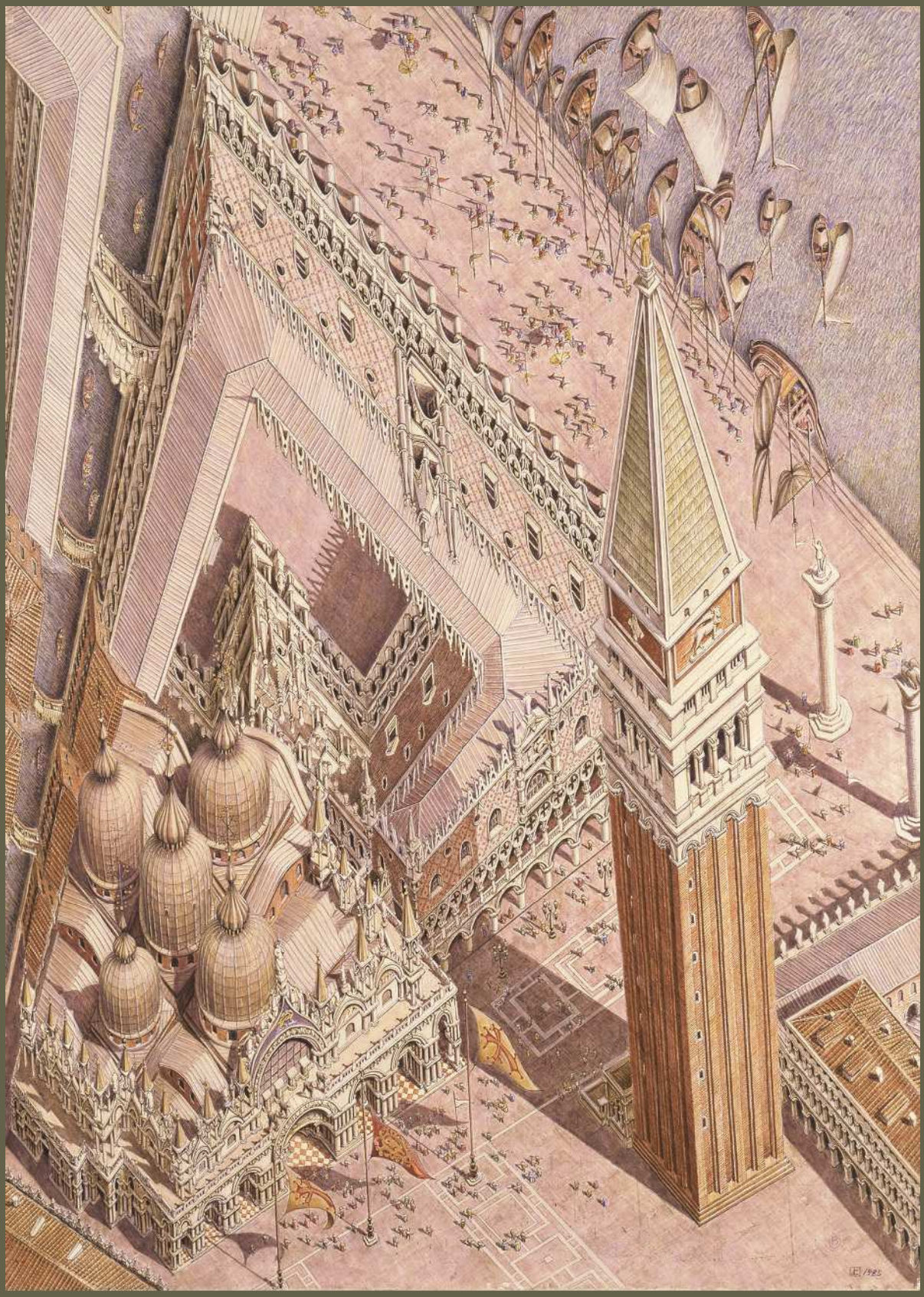
fam.s ファムス通信 No.49

friends of art museum, saitama



現代アートチーム 目 [mé] って何？

「さいたま国際芸術祭2023」のディレクターに就任!!

Kojin Minamigawa Masui

—目[mé]はアーティスト・荒神明香、ディレクター・南川憲二、インストーラー・増井宏文を中心とする現代アートチーム。その作品は、いつも予想を裏切って新しい感覚の世界へ連れて行ってくれます。大注目の目[mé]のメンバーである荒神さん、南川さんにインタビューしてみました—

目[mé]《Elemental Detection》(2016年)
旧民俗文化センター，さいたまトリエンナーレ2016参加作品

目[mé]《Elemental Detection》(2016年)
旧民俗文化センター，さいたまトリエンナーレ2016参加作品
撮影：衣笠名津美

Q 1．アトリエを埼玉県北本市に構えたのはなぜですか。

南川さん：北本市で開催された「北本ビタミン2010北本まちの雑木林」で駅前の改装リノベーションをするアートプロジェクトに、参加したことがきっかけです。
まだ、目[mé]の結成前で、当時(2010年)、プロジェクトにwah document*（南川憲二さんと増井宏文さんらのアート活動)、日比野克彦さんや美術家の藤浩志さんが集結し、北本市の空きビルを拠点としていました。その事務局メンバーに荒神さんが加わって意気投合し、不動産をベースにしたアートプロジェクトをやりたいと思い、提案しました。展示されている不動産情報、物件情報、家賃もセットにしたアートプロジェクトです。その流れで市内をリサーチし情報を収集しました。その時に使った場所や関わった方々との人間関係も構築できたので、北本市に目[mé]のアトリエを構えました。

Q 2．目[mé]はとても印象に残る表記ですが、その由来を教えて下さい。

荒神さん：初めてチームの名前を考えたときにどれもしっくりこなくて、南川さんに"大切すぎて気付かないものはないか"と提案しました。それが目[mé]になりました。
[mé]の表記は日本語の「目」の発音で、海外でも「め」と読めるように音も大事にしたいという思いからです。

Q 3．頭の中で思い描いた不確かなものを現実化（可視化）するという難題をどのようにかたちにしていますか。

南川さん：スタートは荒神さんのモヤモヤした抽象的なものから始まります。荒神さんは例えば、「木から伸びる枝は全て正しい。一本の太い木から無数の枝が伸びていて、それが一本も枯れていないということは、辿った枝の道は全て正解を選んで出来ている」といいます。そんな荒神さんの考えをヒントに僕はこんな形にならない?とアイデアを提案し二人で練っていきます。そして、増井さんへプレゼンをし、実現してみたいと思ってもらえると、三人の方向性が合致し、動き出します。逆にインストーラーの増井さんがピンとこなかったりすると、それは何かが濁っていたり、違うのではないか、という判断になります。そこには何か見えない原因があると思います。

Q 4．完成し、発表した作品はその後、どのようにしているのですか。

南川さん：基本的には残したいものは大きなものでも可能であれば残しています。そのまま地元の方々や主催者が管理して恒久設置の作品もありますし、撤去しないといけないこともありますが使えそうなものは分解してアトリエの倉庫にとっておく場合もあります。リサイクルをして利用することもあります。アトリエは道具や作品の部品であふれていてちょっとしたホームセンターのような状態です。

さいたま市内の風景　撮影：目[mé]

さいたま市内の風景　撮影：目[mé]

Q５．今回の「さいたま国際芸術祭２０２３」ですが、現在、乱立とも言われている芸術祭の中で、どのように新たな芸術祭を展開できるかを考えているというお話をお聞きしました。どのような構想をお考えですか。

南川さん：2000 年頃から始まり、全国で沢山の芸術祭が開催されました。そしてそのピークは過ぎて、現在は減少傾向にあると言われています。しかし、芸術祭は、アートと人が様々なかたちで出会える大切な機会です。さいたまでは、より多くの人がアートに出会えるような、新たな体験が生まれる芸術祭を目指したいです。もう、自宅のドアを開けた時から芸術祭が始まっているような、そして、芸術祭会場を離れてもそれが続いていくような、作品や芸術祭の会場だけに依存しなくても、鑑賞者自身の中で鑑賞体験が日常にまで広がっていくような、そんな芸術祭にできないかなと構想しています。

例えば千葉市美術館で開催した目 [mé] の個展では「スケーパー*」というちょっと変わった企画を展開しました。スタッフや工事関係者、監視業務の人などが会場にいるのですが、それが一体、パフォーマーなのか、そうではなく実際にそこにいる人なのか、分からない状態にしてあるんです。そこで、鑑賞者はどうやってそれを受け止めようかと思案することになります。今回の芸術祭でも、この「スケーパー」のような展開を考えたいと思っています。それは、鑑賞者自身が感じたことが作者や作品の意図を、いともあっさりと超えていくような、そんな状態にならないかなという思いがあるからです。この「スケーパー」という曖昧な存在は、芸術祭へ向かう道すがら近くに歩いている人や、工事をしている作業員、あるいはコンビニで買い物をしている人までを含みます。それによって、どこまでが鑑賞するべき対象なのか、それ自体を鑑賞者に委ねてみるという試みです。

さいたま市内の風景　撮影：目[mé]

木の幹が地面から生えて、そこから枝が伸びるだけで、荒神さんにとっては鑑賞するべき「世界」が広がっています。僕にとっては、見るに足りないただの木でも、荒神さんがそこに何かを感じとることで、目［mé］の作品は生まれています。「スケーパー」は、そんな風に感性を開いてこの世界を自分の目で「みる」きっかけになったらと思っています。

―現代美術ってわからない！ってよく言われます。でも、そのわからないことが感覚の領域を広げることに繋がっていくのではないでしょうか。今回の芸術祭も目［mé］によって、その世界に引き込まれ、現代美術、新しいアートを楽しむ喜びが広がっていくことを心待ちにしています―（A.K.,M.M.,N.K.）

* wah document：
南川憲二さんと増井宏文さんらのアート活動。各地に赴き一般募集した参加者と出し合ったアイデアや、街で集めたアイデアを即興的に実行する集団表現活動をベースに、アイデアが「作品」になる瞬間、感覚がゾクっとするような瞬間に共感を生み出すべく活動を展開。

*スケーパー：
目[mé]による造語で、「景色の人」という意味。
Scaper=scape(景色)＋person（人）のこと。

HPはこちらから
▼

おでかけ あーとすぽっと　埼玉画廊 へ行ってきました！

Art Spot

川口市栄町 3-105-15-2　3 階
TEL：048-271-5088

川口駅東口を背に徒歩１分、大きなペデストリアンデッキの突き当りに「埼玉画廊」はあります。社名は「エスパス・ミュウ」。フランス語でエスパスは空間、ミュウは蛹が蝶になる瞬間を意味しています。“画廊” という空間に一歩ふみ入れ、アートに触れた後に、蝶が飛び立つように清々しい気持ちに変化して帰っていただきたいという思いを込めて岡村睦美さんが 1996 年に開きました。

当初はフランスを中心にヨーロッパの 20 世紀画家の作品を紹介していました。やがて埼玉県には企画画廊というものが数えるほどしかなく、埼玉の作家は東京の画廊で作品を発表しているということに気づき、埼玉の作家にも力を入れようと思いました。そして「埼玉画廊」という名の店舗にしたそうです。

3月初旬、画廊を訪れました。入るとすぐ塗師祥一郎さんの油絵が目に入ります。1 点、2 点、3 点...いずれも雪景色が描かれており、それぞれの場所、雪質も違う感じです。白の起伏と穏やかな空気感に足が止まります。2003 年に日本芸術院会員となった塗師祥一郎先生とは、2005 年にフランス国民美術協会（サロン・ナショナル・デ・ボザール）の招待を受け、ルーブル美術館の「カルーセル・ド・ルーブル」にて作品を展示するなど、長いお付き合いで、「塗師祥一郎鑑定委員会」も発足しました。

この日、企画展は開催されていませんでしたが、企画展の作家さんはどのように決めているのでしょう? 岡村さんに尋ねると「埼玉にゆかりがあり、現在の日本画壇の中で活動されている方、そして、埼玉だけにかかわらず将来を見据えた作家さんの作品も選んでいます。」と仰っていました。

帰りがけ、入口のガラスケースの中に「株式会社 21 世紀文化芸術研究室」「ＮＰＯ法人アート・コア・川口　事務局」と書かれたプレートが。

これについて岡村さんは、「埼玉画廊を立ち上げて 30 年近くになりますが、一画廊ができる美術に関する普及には限界があり、美術を一般の人にもっと広く普及・伝達しないといけないと感じて、ＮＰＯ法人のアート・コアを立ち上げました。また、画廊の仕事だけでなく、ＮＰＯでやっている仕事を発展させるような事業を行っていこうと思い、『21 世紀文化芸術研究室』という会社を設立しました。４月からは川口市立アートギャラリー・アトリア*と旧田中家住宅*の運営も務めることになりました。」と話されていました。

47 年前、川口市に住むようになり、川口市に開いた「埼玉画廊」。2023 年度も企画展の予定は盛りだくさんです。（A.K.,N.K.）

*川口市立アートギャラリー・アトリアは平成18（2006）年4月にオープンしたアート施設です。市民が「新しい表現に出会う場」を目指して、「ものづくりのまち」におけるアート活動の拠点として活動しています。

*旧田中家住宅は、川口市にある歴史的建造物で、国の重要文化財に指定されています。

HPはこちらから▶

【令和５年度の展覧会予定】

2023 年
- ５月　13 ～ 27 日「伊津野雄二展」Yuji Izuno（彫刻）
- ６月　「版画にみる現代アート展」（版画）
- ７月　「安達時彦　小品展」Tokihiko Adachi（油彩）
- ９月　「吉田喜代美展」Kiyomi Yoshida（日本画）
- 10 月　「木下晋展」Susumu Kinoshita（鉛筆画）
- 11 月　「蛯子真理央展」Mario Ebiko（油彩）
- 12 月　「高野浩子展」Hiroko Kono（彫刻）

2024 年
- １月　「藤井誠展」Makoto Fujii（油彩）

伊津野雄二
《風の道標》

public Gallery1-4

ギャラリー・インフォメーション

埼玉県立近代美術館一般展示室　展覧会情報

Gallery Information

＊日程・内容は変更される場合があります。
最新の情報は各主催者へお問い合わせください。

第49回埼玉二紀展

2023年7月18日(火)～7月23日(日)
一般展示室 1,2,3,4

二紀会埼玉県支部所属作家展。昨年10月の第75回二紀展の受賞作家の特別展示のほか、大作を中心に約100点の作品を展示。

昨年の会場風景

Sakura Isono / 原島辰男 二人展

2023年7月25日(火)～7月30日(日)
一般展示室 4

カメラを構えシャッターを切る原島さん。誰もが経験する、ふとした時のあの気持ち。心の中の景色を切り取って、作品にするIsonoさん。この二人が大切にしているのは、表現こそ違いますが、「瞬間」なのです。

本音で話せるっていいよね！／街角の自転車

ヨシズミ　トシオ個展 第68回ありあるクリエーションズ藝術企画

2023年8月29日(火)～9月10日(日)
一般展示室 4

新・近作の油彩画、水墨画、銅版画、表現の可能性の展示。海外で開催されました国際トリエンナーレの受賞作品も併せて発表いたします。御高覧戴けましたら幸甚です。

前回の会場風景

第38回渓水会展

2023年10月3日(火)～10月8日(日)
一般展示室 4

いろんな分野の人達が集まった展覧会です。油彩画、水彩画、水墨画、墨彩画、パステル画、鉛筆画、版画、工芸品等、バラエティーに富んだ展覧会ですので、御来場の皆様には楽しんでいただけると思います。

前回の会場風景

書法研究海游舎書展

2023年10月17日(火)～10月22日(日)
一般展示室 1

この度第一室にて第8回海游舎書展を開催。海游舎書会会長は、産経国際書会にて最高顧問を勤める山下海堂先生。会員も実績のある書家から若手気鋭の集まりです。会員みんなで10月の書展開催を楽しみにしています。

前々回の会場風景

ここが見どころ！ 表紙解説：上村次敏の人と作品 Spot Light

上村 次敏
（うえむらつぐとし）

1934年（昭和9／福岡県久留米市）―1998年（平成10／埼玉県所沢市）

1961年武蔵野美術学校卒業。在学中から、植物のような形を細密に描く水彩画で注目され、59年第3回シェル美術賞展で3等を受賞。63年には第3回パリ青年ビエンナーレに出品した。80年代に入ると、テンペラの技法によって、西欧の大聖堂や過去の名画などをモチーフに、天地が反転するような空間を描いた。

表紙作品
《サン・マルコ広場》 1985（昭和60）年
テンペラ、石膏下地、カンヴァス
100.0×72.3cm

建物から群衆まで細密に描かれた画面。全体を見ると、実に不思議な空間で構成されています。左手前の建物は奥に進むにつれて広がり、画面上部では反転した風景があらわれます。一点から見る空間表現にはこだわらず、手前と反対側から見た建物の姿を接合して描いており、あたかも上空を回りながら俯瞰（ふかん）しているかのように見えます。空間や奥行きの描き方を一貫して追求してきた上村次敏にとって、サン・マルコ大聖堂のような複雑な西洋の伝統建築は格好のモチーフでした。入り組んだ画面は、粉末顔料を卵の黄身で溶かし、細かい筆で絵付けするテンペラの技法で描かれています。この根気を要する技法によって、緻密な世界はいっそう繊細さを増しています。

賛助会員名簿／私たちは美術館を応援しています（2023年3月1日現在）

■特別賛助会員

㈱アライ設計
㈱ガロ
税理士法人さかえ会計
DAY HAPPY
松田産業㈱
武蔵野環境整備㈱
メガソーラー機構
浦和興産㈱
㈲埼玉画廊
㈱榊住建
日本畜産興業㈱
丸沼芸術の森
㈱武蔵野銀行
㈱エフエムナックファイブ
㈱埼玉りそな銀行
㈱テレビ埼玉
㈲細井技研
㈱万世
㈱明成 ペペロネ

■法人賛助会員

海游舎
渓水会
埼玉二科会
㈳新構造社 埼玉支部
見沼100年構想の会
㈲ギャラリー藤井
㈱コア
埼玉二紀会
㈲とらや
武蔵野美術大学卒業生会
群炎美術家協会 埼玉支部
埼玉独立
CAF.N協会
㈲中村元
凛の会

■個人賛助会員

一瀬　謙輔
小森　光子
野口　真理
岡田　謙司
清水　武司
廣澤　公太郎
岡部　美代子
髙橋　碩子
丸山　晃
加藤　正宏
滝沢　布沙
横尾　嘉子
小松　弥生
根岸　和美

ファムス (fam.s) とは　About fam.s

ファムス(fam.s)とは、埼玉県立近代美術館友の会フレンドの愛称です。美術館を支援し、芸術文化の振興、心豊かな社会づくりに貢献することを目的に活動しています。
会員には様々な特典があり、入会は随時受け付けております。
詳しい内容については、美術館HP（https://pref.spec.ed.jp/momas/）もしくはフレンド事務局（TEL048-824-0111）までお問い合わせください。

編集後記

目［mé］のインタビューは美術館会議室にてZOOMで行いました。橋渡しから準備、質問する各々の声を拾うためその都度ノートパソコンの向きを変えてくださるなど、細部までご助力をいただきました。埼玉画廊の取材も人との繋がりがなければ実現できませんでした。会員の皆様の作品展「アートでつながる作品展」も新企画としてスタートします。これからもファムスを盛り上げていただきたく、ご協力よろしくお願いいたします。(M.M.)

ファムス通信　第49号　2023年5月発行
編集委員◆秋本圭美／安藤恭子／野口恵子／森　幹枝
紙面デザイン◆木村昭司
発行者◆埼玉県立近代美術館フレンド事務局
〒330-0061 さいたま市浦和区常盤9-30-1　埼玉県立近代美術館内 tel 048(824)0111 fax 048(824)0119

ファムスのキャラクター「ファムちゃん」

©fam.s

●ファムス通信は年2回、5月末と11月末頃発行します。
●ギャラリー・インフォメーションの掲載募集は、5月発行分は2月～3月頃、11月発行分は8月～9月頃です。
●掲載はファムス会員であることが条件で、掲載料は無料です。